

ひそやかな不安の日々—私はどこに住むだろうか

高橋 実

先日、駐車場でバックしようとして入ってきた車と衝突した。後ろを確認してバックしたのに、確認の仕方が不十分だった。お互い、車に傷がついたくらいで怪我もなく、ほっとした。しかし、この小さな事故の後、運転に自信がなくなってきた。マスコミは連日のように高齢者の事故を報じている。運転免許証の返納時期が近づいてきていることを実感する。昭和四十四年運転免許を取得してから再来年で五十年になる。今年は喜寿、八十歳に手が届く歳になった。視力も落ちていて、辛うじて三年前の免許更新では両目で0.7をクリアすることができた。運転免許返納のその時の来る日も決して遠くの事ではない。

車が運転できないとしたら…買い物に行くには、三〇分も歩かねばならない。診療所は近くにあるが、病気が難しいと、中心部の専門病院までいかねばならない。

はたしてその時、この地に住めるのだろうか。周囲には一人暮らし、老人夫婦、空き家が目立つ。

- ① まず子供たちは都会に就職する。遠距離通勤が難しいので、勤務地の近くに家を建てたり、アパートを見つけたりする。
- ② 年老いた親たちは、都会には住めないと生まれた田舎で暮らす。
- ③ さらに年取って来ると老人ホームに入る。
- ④ そしてなくなると住んでいた家は空き家になる。空き家には代々の位牌の入った仏壇や神棚がおかれたままである。墓もそのまま。
- ⑤ 雪に押されて空き家はつぶれ、衰れた姿を晒したまま、放置される。

こういう段階を経て、過疎地の村が崩れてゆく。わが家はこの②段階といえる。長年住み慣れたこの土地には人脈も地縁もたくさんある。車を運転できないとすると、そうした地縁・血縁を振り切って買い物に歩いて行ける場所、バスの本数の多い病院近くに移転しなければならないのではないか。

そう思ってもそれを口に出すことは憚られる。いままで小国文化フォーラムの事務局長を十四年もやってきて、それを途中で投げ出すことになる。また観光協会の仕事とも深くかかわってきた。小国のコミセン事業もしかりである。それを突然やめたら他の人はどういうだろう。身体的・家庭的の、他人が納得する理由があればいいが、例えば末期がんで余命を宣告されているとか、脳障害で運転できない状態になったとなれば、だれでも納得してくれるだろう。また妻の介護が必要になったときも同じである。

それだけではない。家の仏壇・墓の管理などもどうなるだろうか。

何よりも書斎の本の始末をどうするか。引きとってくれそうな古書店も見つからず、気持ちよく寄付を受け入れてくれる図書館もない。棄てるだけでもたいへんな手間である。活字本ならともかく、六十年間もつけてきたわが日記類は捨てるに忍びない

生まれて、七十七年間住んだこの土地を捨てるには様々な条件をクリアしなければならない。そしてそれを越えてこの私はどこで最期の時を迎えることになるのだろうか。やはり、八石山の夕日が輝く故郷小国の墓地で眠りたい。少年の日に、泳いだ渋海川のほとりで眠ることが一番の願いになるだろう。小千谷の生んだ世界的詩人西脇順三郎はあの山本山の頂上の巨大な碑のもとで永遠の眠りに就いている。あの頂上から雪を頂いた越後三山の雄姿を眺められる。大きく蛇行して流れる日本一の大河信濃川を眺めることができる。それが故人にとってのもっとも心安らぐ場所に違いない。

わが肉体が減んでも、あちこちに書きなぐった文章の数々が生前のわが想いを子供や孫たちに、さらに私に知らない、その子孫たちに伝えてくれるだろう。

それを考えると、いつその最期の時が、最後の場所があっても心安らぐ。しかし、この私はこれから残された時間をどこで住むのだろうか。ひそやかな不安の日々は続く。